

タミル古典文学の基礎的研究

——恋愛文学の術語：Kuruntokai の詞書から——

高 橋 孝 信

はじめに

タミル古典文学は、古代パーンディヤ王朝の首府マドゥライに存在していたとされる、文芸院 (caṅkaṅ [サンガム]) の名にちなんで、サンガム文学と呼ばれている。

本稿は、そのサンガム文学の一大ジャンルであり、量的には、作品数の過半を占める恋愛詩の¹⁾、研究の基礎である術語の理解のために、まず恋愛詩の分類・主題・作詩技法などの概略を示し〔第Ⅰ節〕、その上で、それら術語の意味内容を明らかにするものである〔第Ⅱ節〕。

Ⅰ タミル古典文学概説

Ⅰ-1 サンガム文学

チェーラ・チョーラ・パーンディヤの、古代三王朝の栄えた地を中心として、およそ紀元1世紀から3世紀の間に、数多くの詩が作られたが、これらの詩は、後に、詩の長さや内容などにより分類・編纂され²⁾、*Eṭṭuttokai* [エツトゥトハイ] (『八つの詞華集』) と、*Pattuppattu* [パットゥパーツトゥ] (『十の長詩』) という二大詞華集にまとめられた〔表1参照〕。今日我々がサンガム文学と呼ぶのは、この二大詞華集のことである。

サンガム文学は、その後、紀元600年から900年にかけて盛り上ったバクティ運動や、

- 1) 本稿で恋愛詩(恋愛文学)と呼ぶものには、後述する如く、夫婦間の愛も含まれる。正しくは、「恋や結婚後の愛を主題とする詩」あるいは「男女の間の愛の詩」とすべきであるが、便宜上恋愛詩で統一する。
- 2) S. Vaiyapuri Pillai〔参考文献参照〕は、「4・5世紀は文学史上画期的な時期である」という。それは、これら詞華集の編纂という大事業がなされたからである。これらの編纂に携わったのは、文学理論にも通じた、文芸院(サンガム)の構成員達であったと思われる。各々の詞華集の制限行数や内容については〈表1〉参照。

タミル古典文学の基礎的研究 (高橋)

バラモン教・仏教・ジャイナ教などの影響により、文学史の流れが大きく変えられたため、人々からその存在すらも忘れ去られてしまった。しかし、19世紀後半から今世紀初頭にかけて、U. V. Swaminatha Aiyar [1855-1942] などの尽力によって、サンガム文学の古い貝葉写本が掘り起こされ、収集・整理されて次々と出版され、サンガム文学は、再び人々に知られるようになった。

こうして、今日我々に伝わるサンガム文学の作品は、その数およそ2380にのぼる。こ

〈表1：二大詞華集〉

Ettuttokai (『八つの詞華集』)

	(詩数)	(各々の行数)	(作者数)	(内容)
1. <i>Aiṅkurunūru</i>	500	3-6	5	akam
2. <i>Kurunṭokai</i>	400	4-8	205	akam
3. <i>Narriṅai</i>	400	9-12	175	akam
4. <i>Patirruppattu</i>	[8篇]	[一定せず]	8	puṛam
5. <i>Akanāṅūru</i>	400	13-31	145	akam
6. <i>Puranāṅūru</i>	400	[一定せず]	157	puṛam
7. <i>Paripāṭal</i>	70	[一定せず]	13	akam/puṛam
8. <i>Kalittokai</i>	150	[一定せず]	5	akam

Pattuppattu (『十の長詩』)

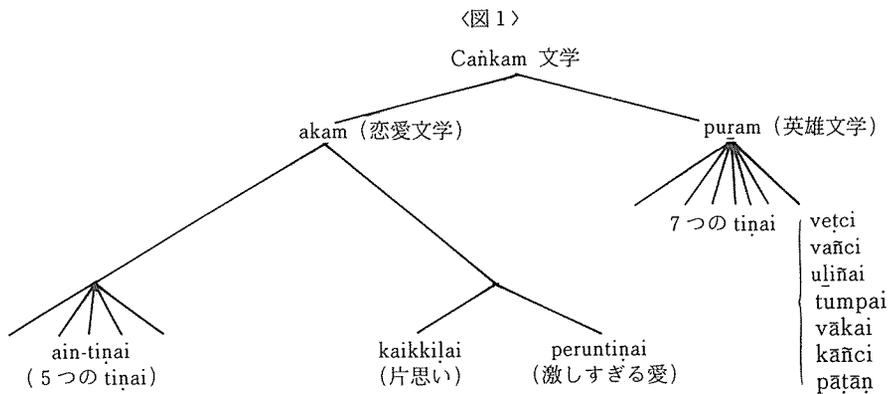
	(行数)	(作者)	(内容)
1. <i>Porunarāruppatai</i>	234	Muṭattamakkaṅṅiyār	puṛam
2. <i>Paṭṭiṅappālai</i>	301	Kaṭiyālūr Uruttiraṅkaṅṅaṅār	akam
3. <i>Perumpāṅāruppatai</i>	500	Kaṭiyālūr Uruttiraṅkaṅṅaṅār	puṛam
4. <i>Kuṛiṅciṅpāṭtu</i>	261	Kapilar	akam
5. <i>Malaiṅpaṭukaṭām</i>	583	Peruṅkaucilaṅār	puṛam
6. <i>Maturaikkāṅci</i>	782	Māṅkuṭi Marutaṅ	puṛam
7. <i>Neṭunaivaṭai</i>	188	Nakkīrar	akam
8. <i>Mullaiṅpāṭtu</i>	103	Nappuṭaṅār	akam
9. <i>Cirupāṅāruppatai</i>	296	Nattattaṅār	puṛam
10. <i>Tirumuruṅkāruppatai</i>	317	Nakkīrar	puṛam

(注意) 上述の順番は、詞華集の成立したおおよその順番である。

れらは一部の作品を除き、全て aciriyam (akaval) または vañci という韻律をもって書かれた詩であるが、行数には大きなばらつきがあり、最も短いものは3行、最も長いものは782行からなっている。また、これらの作品から、470余の詩人名が知られている。

I-2 古典の二大ジャンル

サンガム文学は、理論家達により内容から、akam [アハム] と puram [プラム] とに二大別される [図1 参照]。



akam とは、「内」を意味する語であり、人間の内的・私的な営みを、男女の愛というものを通じて描くジャンルである。ただ akam は、特定個人の恋愛事を扱うものではない為、個人名などが作品に出ることはない。

一方、puram は「外」を意味する語であり、人間の外的・公的な営みを、戦争や英雄行為を中心にして描くジャンルである。puram では、王や英雄の名前や讃辞を送る詩人名などは明記される。

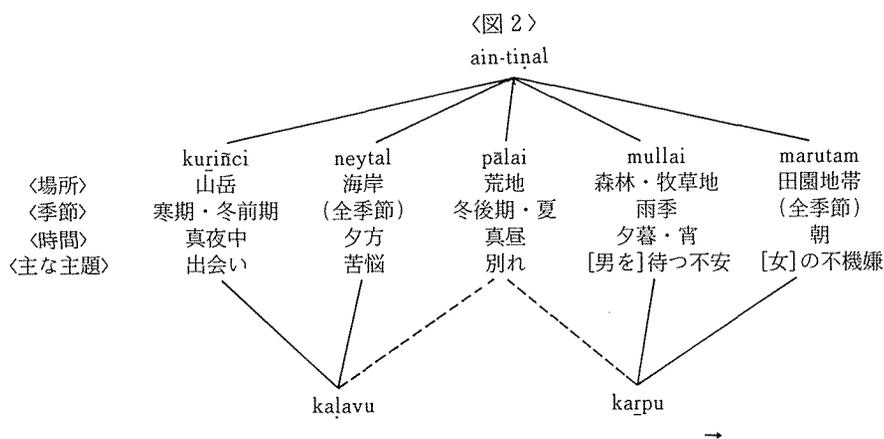
これら akam と puram とは、主題やその主題の展開する場所などにより、更に各々、7つの tiṇai (小さなジャンル) に分類される。

まず puram の方では、veṭci (牛の略奪)、vañci (敵地への侵入)、uḷiṇai (城砦の包囲)、tumpai (激しい戦闘)、vākai (勝利)、kāñci (この世のはかなさ)、そして pāṭaṇ (勝利者への賞讃) の7つの tiṇai に分けられる。なお、これらの tiṇai の名称は、各々花の名前に由来し、兵士達は、戦いの種類に応じて、その花を身につけたといわれる [例えば、牛を奪う戦いの際には veṭci の花を身につける]。

次の akam であるが、まず相思相愛を基調とする ain (5つの) -tiṇai と、不適当な愛や片想いを扱う kaikkiḷai、及び情欲の激しすぎる愛を扱う peruntīnai、とに分類され

るが、後の二者 (kaikkiḷai と peruntṭai) を扱った詩は、サンガム文学の中にはほとんどない。従って、ここでは aintṭai のみを扱うことにする。

puram の詩は、叙事的であり、作者の心情も詩語の表面に直接表わされる為、内容の理解は比較的易しい。一方、akam の詩は、ある特定個人や作者の恋愛を描くものではない。むしろ人が誰しも抱く恋愛の情というものを、作者が代弁する形で叙述するのである。そこで、おのずと作者達に好まれる恋愛の主題は限られてくる。またそれらを描く際に、作者はある特定の恋愛の情というものを、ある特定の場所・季節・時間 [図2参照] や、その場所に固有の動植物などに、寓意する形で表現する。従って、ある場所やそこに固有の動植物などによっても、作品の主題が暗示される。その意味で、どのような主題がどのような事象 (場所等) に結びつけて表現されるか、ということの理解を抜きにしては、akam の内容把握は困難である。



そこで、注釈家達がよくやるように、主題と事象とを結びつけた形で5つの tṭai を順次略述すると、以下のようになる。

1. kuriñci [クリンジ]: 男女の出会い、逢引、親による女の監禁、二人の間柄の暴露などが主題で、場所は山岳地、季節は冬である。
2. neytal [ネイダル]: 密会、女の焦躁感などが主題で、場所は海岸である。
3. pālai [パーライ]: 男女の別離、[女の両親が結婚に反対する時] 駆け落ち、などが主題で、場所は荒地、時間は真夏の昼間である。
4. mullai [ムライ]: 女が男の旅からの帰宅を待つこと、男が戻ると言った雨季の到来による悲しみ、などが主題で、場所は森林・牧草地、時間は雨季の夕方である。
5. marutam [マルダム]: 男(夫)が遊女のもとへ行くこと、そのための女(妻)の

不機嫌、仲直り、などが主題で、場所は町の郊外の豊かな水田地帯である。

これらの *tiṇai* の名称は、各々の場所に特有の花の名前に由来し、各々の *tiṇai* の名称であると同時に、土地そのものをも意味する〔例えば、クリンジは、花の名、*tiṇai* の名称、そして山岳地帯をもさす〕。

また、これら5つの *tiṇai* は、結婚前の秘密の恋の段階 (*kaḷavu*) と、結婚後の段階 (*karpu*) とに分けられる〔図2参照〕。*kuriñci* と *neytal* は *kaḷavu* に属し、*mullai* と *marutam* は *karpu* に属するが、*paḷai* は、別れの種類により、*kaḷavu* に属するものも、*karpu* に属するものもある。

I-3 作詩の技法

ではここで、実際に *akam* の作品をみとみることにする。出典は『八つの詞華集』中のひとつの詞華集 *Kuruntokai* [クルンドハイ] の第66番目の詩〔筆者試訳〕である。

大きな幹のコンライの木は、何と愚かなのだらう。
 小石だらけの道を行^つたあの男^{おとこ}が〔帰ると〕言った季節は
 まだ来ていないのに、通り雨を雨季〔の始まり〕と思って、
 生い繁り、枝に房のように、
 花を咲かせてしまうなんて。

[Kōvattanar 作]

この詩は、どんな〈場所〉を背景としているのか、明確に示してはいない。しかし、作者は「雨季」という季節を描き込むことにより、この詩が *mullai* に属するものであることを示している。また「コンライ (*konrai*)」というのは、雨季になると花の咲く、*mullai* の地に特有の植物である。従って、この詩の主題は、*mullai* の詩に特有の「男の旅からの帰りを不安とともに待つこと」と関連のあることが暗示されている。

さて、詩そのものは、この詩のように、発話者を明示しない。しかし、恋愛詩に表れる人物〔または物〕は限られており、しかも各々の表れ方も一定している。それら登場するもの、及び各々の表れ方、の主なものを図式化したものが、〈図3〉である。

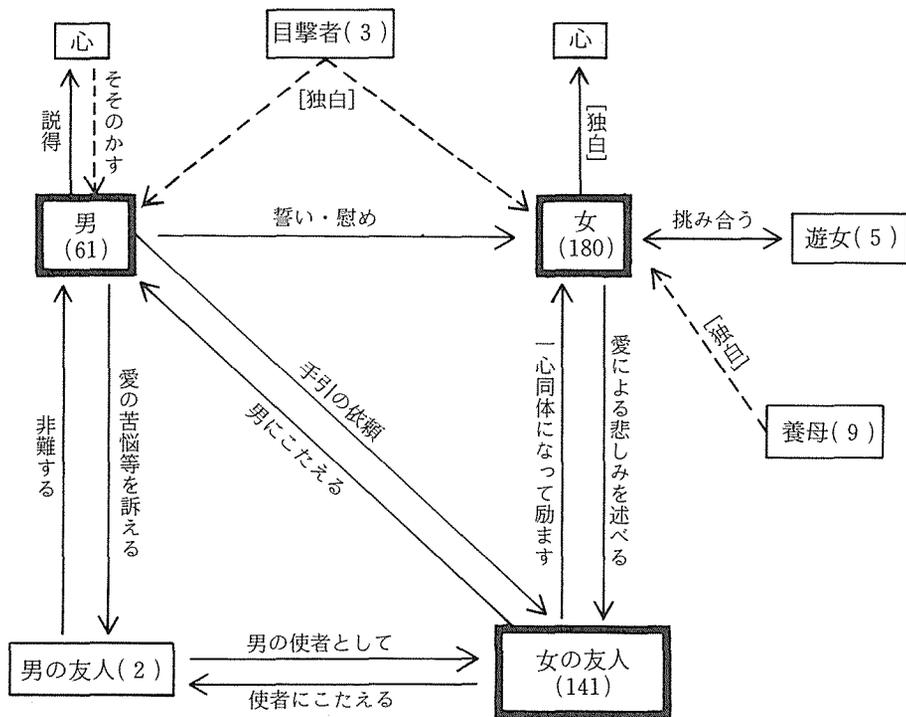
詩人は、〈図3〉のような表れ方をすると、登場人物のいずれかの口をかりて、他のものに〔読者に、ではなく〕語りかける形式をとる。上述の詩では、男が戻ってくる筈の雨季が来ても、男が戻らず、悲嘆に暮れる女を見て、「コンライの木が馬鹿なのだ。単なる通り雨を、雨季の到来だと勘違いして、花を開かせてしまうのだから。まだ本当の雨季は決して始まっていない。だから心配するな。あの男^{おとこ}はきっと帰ってくる。」と言って、友人が女を励ましているのである。

I-4 詞書 (turai)

このように、恋愛詩には、その中で使用される言葉によって、理解されることが期待されている状況がいつも供っている。このような、詩語とそれによって連想される状況との関係を、仮にここで詩の状況設定と呼ぶことにするが、その状況設定を明快に示しているのが、個々の詩に付けられた、turai と呼ばれる詞書である。

turai とは、元来「流れ(川)」、「[しばしば行く]場所」、「[そこへ行く]途」などを表

〈図 3〉



(注意) ・矢印は発話者→対話者, を示している。

・ () 内の数字は, Kuruntokai の詞書による, 発話者となる数である。

わす言葉である³⁾。それは丁度「人や動物などを、水飲場へ正しく導く途⁴⁾」のように、

3) A Dravidian Etymological Dictionary. 2773

4) Tolkappiyam [II 凡例を参照] 第3章第56詩節に対する14世紀の注釈家 Naccinarkkiniyar の注釈。

読者を詩の正しい理解へと導いてくれる。例えば、先の *Kuruntokai* 66に付けられた詞書には、「雨季の到来に悲しむ女を『これは[本当の]雨季ではない』と言って、女の友人が励ますこと」と書かれている。

この例のように、誰が誰に、どのような状況の下で何を言わんとするのか、詩人が暗示するに過ぎぬことを、詞書は明示するのである。

詞書が、何時頃誰によって書かれたのか、確かなことは分っていない。ただ、複数の詞書が付けられている詩のあることや、詩に合わない詞書が僅かながら存在することから、詞書が詩の作者自身によって書かれたものでないことは明らかである。恐らく、これらの詞書は、詞華集が編まれた時に編纂に携わった人々や、後の注釈家などによって、書かれたものであろう。

II 恋愛文学の術語、およびその内容：*Kuruntokai*の詞書から

タミル古典の恋愛詩には、I-4で述べた如き、詩の状況設定があり、その理解なしには作品の理解は困難である。そこで、その詩の状況設定を明快に示している、個々の作品に付けられた詞書(*turai*)を正しく解釈することが、古典恋愛詩の理解の上で心要となる。ところが詞書には、主題ないし内容を分類的・区分的に表示する、ある一定の術語がしばしば用いられている為に、それら術語の意味内容を把握することが、まず要求される。

そこで本稿では、*Ettuttokai*（『八つの詞華集』）のうちのひとつの詞華集 *Kuruntokai* [クルンドハイ]のすべての詞書から、*akam* 文学における術語を抜き出し、注釈家達の記述も盛り込みつつ、術語の意味内容を説明することにする。*akam* 文学の術語で、ここに見出語として表れないものもあるが、それらの中で重要なものについては、各項目の説明部分で触れることにする。

Kuruntokai は、「短かい(*Kurun-*)詩の、集まり(*tokai*)」という意味をもつ、4行から8行の恋愛詩、400詩からなる詩華集である⁵⁾。この詞華集の編纂事情については、確かなことはほとんど何も知られていない。恐らく、実際の作詩の時期の少し後の、紀元4世紀頃に、この詞華集の奥付から知られる *Purikkō* [王族出身か?]によって編纂されたものと考えられる。

5) ただし、現在のテキストには401の詩の他に神への讃歌が含まれ、9行詩も2つ(307, 391)存在する。

凡 例

- 見出語はアルファベットの順に配列してある。
- 見出語の後の { } 内の数字は, turai の番号である。turai が詩に 2 つ付いている場合は, ①, ②で区別した。
- 見出語には, 分り易くするため, 連声を避けて-を入れたものがある。
- 見出語の表記については, タミル人にならい, 名詞形 (-pu, -vu, -[t]tal)を用いた。
- タミル文字のローマ字転写は, *Tamil Lexicon* の方式にならった。
- [] は補いを, () は言いかえを示す。
- 必要に応じて, タミル文学史上最古にして最も優れた文法書 (文学理論書), *Tolkappiyam* (Tol. と略記) の詩節番号を記した。
Tolkappiyam は 3 章 27 節, 約 1600 詩節からなり, 第 1 章で音韻論, 第 2 章で形態論, 第 3 章で詩の意味内容・韻律・修辞法を扱う。第 1, 2 章の原形は古く, 紀元前 2 ~ 1 世紀に出来たと思われるが, 第 3 章はサンガム文学前後に原形が出来たと思われる。作者は作品名から *Tolkappiyar* といわれる。
- 術語については, 本稿に付した参考文献以外に, マドゥライ大学 (Madurai Kamaraj Univ.) のタミル語科主任 Rm. Periyakaruppan 教授から直接教えを受けた。

1. alar {109, 311, 320, 373}

人々 [特に村人] の, 二人に関する噂話。

噂話を表わす語は他にもある。kavvai は中傷を含んだ噂話。ampal も噂話であるが, Tol. 1085 に対する *Iḷampuraṇar* [12世紀] の注釈によると, ampal は口に出して言わずに, 何となく目配せや身振りで示し合うことであるのに対し, alar は口に出して言うことである。*Iṟaiyaṇār Akapporuḷ* 22⁹¹ に対する *Nakkīrar* の注釈によると, ampal は, 植物でまさに芽が出ようとする時で, aral は満開の時である。ちなみに今日, 結婚のことを tiru(聖なる)-maṇam というが, maṇam とは, 花の満開時の芳香を示す語でもある。

1-a. alar malivu {393}

- 6) 別名 *Kaḷaviyal*。全体は 60 の短い詩節からなり, 1-33 詩節で *Kaḷavu* [I-2 参照] を, 34-60 詩節で *karpu* を扱う恋愛文学の理論書である。作者はシヴァ神 (*Iṟiyaṇ*) 自身とされる。恐らく紀元 4 ~ 6 世紀頃の成立。

噂話が段々盛んになること。

このことが、二人を結婚へと駆り立てることになる。

2. allakurī[-paṭutal] {100②, 120①, 128①}

あらかじめ示し合せてあった合図 (kuṛi) を, [偶々動物などによってなされたりし] 聞き過し (見逃し), 逢引に失敗すること。

3. arattoṭu nirral (araṇ) {15, 23, 26, 31, 52, 214, 259, 305, 321, 333, 362, 374, 379}

[女の友人が] 二人の秘密の間柄を [法(aram)をもって] 暴露すること。

恋煩いで痩せ衰える娘を見て, 両親はムルガン神 (Murugaṇ) に取りつかれたと勘違いし, 祈禱の儀式を行おうとする。そんな時に, 恋煩いであると暴露してしまうこと。27. kaṭṭu-kāṇutal, 及び63. veri を参照されたい。

4. arāmai {6, 12, 16, 22, 38, 49, 57, 86, 90, 102, 130②, 152, 153, 160, 181, 248, 259, 260, 264, 283, 296, 305, 320, 329, 373, 380, 398}

女の苦悩・悲嘆。

両親の監視の厳しいこと (7. ceṛippu), 結婚の遅れ (61-i. varaivu niṭṭittal), 別離 (6. celavu), 夫が遊女のもとへ行くこと (44. parattaiyir pirivu), など原因は様々である。愛の喜びをうたう詩はほとんどなく, 大部分が, 女の側からの愛による苦悩を表す詩であることは, タミル古典恋愛詩の特徴のひとつであるといえる。

5. aruvittal {13, 21, 36, 37, 130①, 134, 160, 187, 210, 236, 248, 367②, 380, 381, 394}

[女の友人が] 悲しむ女を慰め, 力づけること。

女の友人は, 常に女と一心同体となって共に悩み, 励ます存在である。

6. celavu

(1) 駆け落ち {7}

59. uṭaṇṇōkku を見よ。

(2) 別れ {22}

Iṛaiyanār Akapporuḷ 40では, 別れに6種をあげる。それらは, 学習・戦争・王の使者・富・辺境警備・遊女, などを目的とする別れである。*Tol.* では, このうち最初の4つのみを挙げる [*Tol.* 971, 974]。これらのうち, akam でしばしば起るのは, 戦い・富・遊女のための別れである。

6-a. celavu-aḷuṅkūtal {71, 101, 256, 267, 347, 376, 388}

〔別れを悲しむ〕女を慰め〔納得させ〕る為に、男が出発を延ばすこと。

6 - b. celavu-kurippu-aṛital {22, 207, 331, 348}

男が出発するのが、〔車を用意するなど〕女や女の友人に知れること。

6 - c. celavu-unarttal {20, 76}

男の出発を、女の友人が女に知らせること。

6 - d. celavu-vilakkal {390}

〔女の友人が〕男の出発を止めること。

ただし390では、荒地を〔駆け落ちして〕行く二人を見た人が、それ以上行くことを止める、となっている。

7. cerippu {159①}

男との関係を察知した女の両親が、〔男と会わせない為に〕女を家の中に監禁すること。14. ircerippu に同じ。

7 - a. cerippu-aṛivuruttal {199, 294, 303, 324, 335, 342}

女の友人が、男に、女が監禁されたことを知らせること。

8. cirai-puṛam {3, 55, 89, 90, 109, 123, 125, 141, 159①, 161, 219, 227, 239, 246, 261, 263, 268, 269, 292, 296, 299, 311, 313, 353, 360, 375, 392, 393}

女の家を囲む塀 (cirai) の外 (puṛam) に、男が来ているのを承知していながら、知らぬ振りを装って、女と女の友人とが話すこと。

ここで、両親が気付いたこと、噂がひろまっていることなどを、男に知らせるのである。

9. cū| uravu {384}

男が女、または女の友人に誓い (cū|) を立てること。

誓いの内容は、結婚すること、旅立たないこと、遊女のもとへ行かぬこと、などである。

10. ētam aṅcal {141}

〔男が逢引に通って来る途中の道の〕危険を、女〔または女の友人〕が恐れること。

男は、虎や象の出没する山岳の狭い危険な道を、夜の逢引 (13. iravukkuṛi) のために通ってくる。それを心配すると同時に、そんな危険なことを止め、早く結婚してくれることを望む。

11. etir aḷital {192, 243}

女が、友人の慰めや同情 (5. *aruvittal*) に反撥すること。

12. *irantu pinṅirral* {17, 32, 165, 286④, 337}

男が、女の友人に逢引の手引を要求しに来ること。

逢引には、夜の逢引 (13. *iravukkuri*) と昼の逢引 (43. *pakarṅuri*) との2種あるが、女の友人の手引を必要とする。

13. *iravukkuri* {18, 29, 42, 69, 73, 121, 138④, 141, 158, 161, 244, 261, 292, 312, 313, 340, 346, 353, 372, 375}

夜の逢引。

Tol. 1077には、女の家敷地内で行なわれるとある。この時、男が合図したのを風や動物のせいと勘違いして、逢引に失敗するのが2. *allakuri* である。

13-a. *iravukkuri maruttal* {340}

男の夜の逢引の要求を、[女の友人が] 拒絶すること。

13-b. *iravukkuri nayattal* {336, 346, 353}

男が夜の逢引を望むこと。

13-c. *iravukkuri nayāvāmai* {335}

女が夜の逢引を望まないこと。

13-d. *iravukkuri nērtal* {88, 138②, 150, 179, 355}

男の夜の逢引の要求を、女の友人が受け入れること。

14. *iṅcerippu (iṅcerivu, iṅcerikkappaṭutal)* {141, 401}

7. *cerippu* を見よ。

15. *iṅtalaippāṭu* {62}

最初の出会い (17. *iyarṅkai-puṅarcci*) と同じ場所で [翌日, 2度目の] 逢引をすること。

16. *iṅtattuyttu nīṅkal* {114}

女の友人が、[昼の逢引の] 約束の場所に女を連れて行き、一人残してくること。

17. *iyarṅkai-puṅarcci* {2, 40, 116, 119, 120②, 137, 142①, 300}

運命による、二人の最初の出会い。

一連の主題のうちの、最初のものであり、*kuriṅci* [I-2参照] の典型的な主題である。未婚の娘の仕事のひとつは、山あいの穀物畑の見張りをするることである。そんな時、偶々狩猟で獲物を追ってやってきた男と出会う。この出会いは、神によって定められた出会い、とすることから *deiva-puṅarcci* と呼ばれることもある。ま

た多くの詩は、最初の出会いの時に、二人が契りを結ぶことをほのめかしている。

その為 *kāma-puṇarcci* と呼ばれることもある [Tol. 1442]。

18. *iyar-palittal* {3, 96, 181, 187, 313, 381, 394}

[女が苦悩するのを見て] 女の友人が、男の性格の悪口を、女に言うこと。

- 18-a. *iyarpaṭa molital* {3, 96, 181, 187, 313, 322}

女の友人が男の悪口を言うのを、女が非難し、男を誉めること。

19. *kaiyāru* [eytiṭu kiḷavi] {163}

[女が] 苦悩にやるせなくなつてつぶやくこと。

20. *kaiyurai maṛuttal* {1}

男からの結婚の贈り物を、[女の友人が] 拒絶すること。

kaiyurai とは、男から女への贈り物で、これを受け取ることは、結婚の受諾を意味する。普通贈り物は、花環や、花や草で作った腰につける衣 (*talai*) である。古典には、今日のダウリにあたるものの記述はなく、男が女に何かを贈るのが普通である。

21. *kaḷarutal* {156, 184, 206, 272}

男が恋に陥ちたのを見て、男の友人があざ笑い、非難すること。

女の友人が、常に女を親身に心配する存在であるのに対し、[5. *aruvittal* を参照]、男の友人は、男を非難する存在として表れる。

- 21-a. *kaḷarru-etirmaṛai* {58, 132, 280}

非難する友に、男が正しい方法で答えること。

22. *kāmam mikka kaḷipaṭar kiḷavi* {92, 107}

[女が] 情念に満たされ、自制を失って言う言葉。

23. *kaṇā-kaṇutal* {147}

[相手の] 夢を見ること。

旅先で男が残してきた女の夢を見ることや、女が旅先の男の夢を見ることである。

また、二人が駆け落ちした場合には、女の養母が女の夢を見ることである [Tol. 1143-4参照]。

- 23-a. *kanavu nalital* {30}

夢を見て [悲しくなり] 苦悩すること。

24. *kāppu nikuti* {57, 161, 166, 259, 292, 305, 306}

女を両親が厳しく監視し、外へ出さぬこと。7. *ceṛippu* に同じ。

25. karpu [kalam] {169, 242}
結婚後の生活。I-2 を参照されたい。
26. kaṭinakar
(1)新婚の二人が入る家。{167, 178, 193, 201, 228, 242}
(2)女の母親によって、女が外に出されず、厳しく監視されていること [またその家]。
{247}
27. kaṭṭu-kāṇutal {23}
お告げ (kaṭṭu) の儀式の準備をすること。
恋煩いに痩せ衰える娘を見て、それとは知らぬ両親が、占い女 (kaṭṭuvicci) を呼び、お告げを得ようとする。占い女は、ざるに米粒を入れて、神々の歌をうたいながら、ざるの上の米を選び分けつつ数え、お告げを伝える。3. arattoṭu nirral, 63. veṛi 参照。
28. kāval mikuti {244, 366}
24. kāppu mikuti に同じ。
29. koṇṭutalai-pirital {56}
駆け落ち。59. uṭaṇpōkku を見よ。
30. kuṛai irattal {74}
男が、女の友人に逢引の手引を頼むこと。12. irantu pinṇirral を参照のこと。
- 30- a. kuṛai kūṛutal {142②}
30. に同じ。
- 30- b. kuṛai maṛuttal {14, 173, 182, 276, 286①, 298}
男の逢引の要求を、女の友人が断ること。
- 30- c. kuṛai nayattal {176, 212, 230}
男の逢引の要求を、女の友人が受け入れ [女に勧め] ること。
31. kuṛi piḷaittal {138①}
約束してあった合図を聞き過し (見逃し) 逢引に失敗すること。2. allakuṛi に同じ。
32. kuṛippu vērupāṭu {40}
[女の] 心が変わること。
33. kuṛiyiṭam peyarttal {113, 198}
逢引の場所 (kuṛiyiṭam) を変更すること。
34. makaṭ pōkkutal {84, 144, 356, 378, 396}

女の養母が知らぬ間に、二人に駆け落ちされること。

このあと、養母が二人を捜しに、荒地に出かける、という主題が続く。理論家は、養母は女の友人の母親とするが、実際には必ずしもそうではない。

35. maṭal eṟuṭal {14}

〔女の両親が結婚に反対する時や、女の友人が逢引の手引をしない時などに〕男が、ヤシの葉で作った馬（maṭal[mā]）に乗ると威すこと。

ヤシの葉先は尖っているから、この馬に乗るとするのは自殺行為を意味する。従って女〔や友人〕を威すだけで、実際には行わない。男は飾り立てたこの馬を、村の通りに引き出し、手には女〔と名〕を描き、村人に知らせる。すると人々は男に同情し、男の肩をもつ。この主題は非常に有名であるが、*Kuruntokai* の5つの詩（14, 17, 32, 173, 182）を含め、古典全体でも10詩程度しか、この主題を扱っていない。maṭal[mā]については、*Tol.* 1048, 1057を参照のこと。

36. mey toṭṭu-payīral {2}

〔逢引の時、恥らいをとるべく、男が女の体に触れること。*Tol.* 1048参照。〕

37. muṇṇilai puṟamoḷi {47}

目の前の相手（muṇṇilai）に語りかけることを意図しながらも、その相手とは関係のない第三者に語りかけるように装って語ること。

38. nalam pāraṭṭal {2}

男が女の美しさを誉めたたえること。

39. neñcirku-kūral (-collal) {11, 29, 62, 63, 70, 71, 100②, 101②, 116, 120①, 151, 168, 182, 274, 312, 347, 376}

〔男が〕自分の心に向って言うこと。

富を求めて旅立て、などとそそのかす心に向って、男が言うこと。男と心とは、論争する関係にある。まれに、女が心に向って言うこともあるが、その場合は独白に近い。

40. neruṅki-collal {6, 128①, 152}

粗い言葉で、激しく言うこと。

41. notumalar varaiṅu {31, 321, 379}

〔恋人以外の〕別の男が結婚を申し込みにやってくること。

二人の間柄は秘密である。そうこうしているうちに、別の男が女の両親のもとに結婚の申し込みに来てしまう。そこで、女の友人は、秘密を打ちあける（3. aṟattoṭu

nirral)。

42. pakal vantū-oḷukal {345, 353}

結婚せぬまま、昼の逢引 (pakal-kuṛi) にしばしばやってくること。

43. pakarḱuṛi {48, 73, 123, 294, 353①}

昼の逢引

ToI. 1078によると、村の近くの、女がよく行く場所で行なわれる。13. iravukkūṛi も参照されたい。

- 43- a. pakarḱuṛi maruttal {353②}

男の昼の逢引の要求を、女の友人が断ること。

- 43- b. pakarḱuṛi nērtal {113, 141}

男の昼の逢引の要求を、女の友人が受け入れること。

44. parattaiyīṛ pirivu {91①, 91②, 181, 293, 309, 349, 354, 359}

男 (夫) が、遊女のために女 (妻) を捨て、出かけること。

6種の別れのひとつである〔6. celavu参照〕。parattai は普通「遊女」であるが、「妾」を思わせる場合もある。女と parattai とは、男をめぐる挑み合う関係である。karpu (結婚後の段階) において、この主題の占める割合は3割に近い。marutam〔I-2参照〕の代表的な主題である。

45. paruvam anru [paṭṭatu] vampu {66, 148, 200, 251, 382}

「これは〔男が帰ると言った〕雨季 (paruvam) ではなく、単なる通り雨 (vampu) である」と、女の友人が女に言って励ますこと。

男は旅立つ時に、「雨季にはきっと帰ってくる」と言って出かけた。その雨季が訪れたのに、男が帰ってこないため、「通り雨」と言って励ますのである。mullai の代表的な主題である。I-3を参照されたい。

- 45- a. paruvam kaṅṅu alital {24, 66, 82, 94, 98, 103, 108, 110①, 126, 148, 155, 188, 200, 216}

〔男が帰ると言った〕雨季の到来を見て、女が悲しみ悩むこと。

- 45- b. paruvam kuṛittu-pirital {277, 380}

男が戻る季節を〔女に〕告げて出発すること。

- 45- c. paruva varavil vērupaṭal {285, 314, 341, 380, 382}

男が戻ると言った季節の到来のために、女の容色の衰えること。65. vērupaṭu 参照。

46. piriviṭai alital {59, 65, 66, 82, 98, 130①}

〔男が旅立ち〕別れている間に、女の苦悩すること。

46- a. *piriviṭai arāmai* {4, 5, 27, 46, 60, 64, 67, 77, 104, 190, 191, 218, 241, 325}

46. に同じ。4. *arāmai* を参照のこと。

46- b. *piriviṭai melital* {35, 43, 68, 329, 352}

46. に同じ。

46- c. *piriviṭai vērupaṭal* {41, 180, 281, 287, 314, 330}

別れている間に、〔苦悩のために〕女の容色の衰えること。

以上46. および46- a ~ c. のいずれも、女の側の苦悩・悲しみを扱っている。これらに対し、別れている間の男の苦悩を扱っているものは少ない。いずれも *palai* [I-2 参照] の代表的な主題である。

46- d. *piriviṭai varpuṭtal* {278, 338, 344, 358, 386, 387}

別れている間に悲しむ女を、女の友人が励ますこと。5. *aruvittal* 参照。

47. *pirivu-accam* {137, 300}

男の言動が女に別れを恐れる気持を起こさせること。

47- a. *pirivu nētal* {350}

女の友人が、男の出発に同意すること。

しかる後に友人は女を納得させる。女が納得しない時には、男は出発を延ばして女を説得する（6- a. *celavu-aḷuṅkutaḷ*）。

47- b. *pirivu-uṇarttal* {174, 363, 398}

男の旅立ちに気付いた女の友人が、女にそれを知らせること。

48. *poruḷ vayiṭ pirivu* {16, 79, 140, 153, 283}

富を得ることを目的とした別れ。

6種の別れのひとつで、*akam* では最もよく表れる別れの種類である。男は女や女の友人の哀願を振り切って、荒れた大地を通して出稼ぎにゆく。この別れは、結婚前 (*kaḷavu*) にも結婚後 (*karpu*) にも起ると理論家は言う。作品からは、結婚の前か後かは判らないが、長期間の別れであることは窺える。一方、結婚準備のための短期的な別れを *iṭṭuppirivu* とする。61- a. *varaiviṭai vaittu pirital* を参照されたい。

48- a. *poruḷ murri maṇuttaral* {209}

48- b. *poruḷ murri mīṭtal* {237}

- 48- c. *poruḷ murri pukutaḷ* {99}
 [以上48- a ~ c. はいずれも] 男が求めていた富を得て, [雨季に] 女のもとへ戻って
 くること [あるいは, 帰途につくこと]。
- 48- d. *poruḷ valittaḷ* {101②, 151, 168, 256, 274, 347, 376}
 [別れを恐れ, 出かけるのをしぶる] 男に, 男の心が, 富を得るために出かけるよう
 に強調すること。39. *neñcirku-kūṛaḷ* 参照。
49. *puṇarcci vitumpal* {178}
 男が女 (妻) を非常に抱きたいと思うこと。
50. *puṇarntu nīnkutaḷ* {70, 116, 119, 142①}
 最初の逢引のあと [喜びに満ちた] 男の語ること。
 これを告げる相手は, 多くは自分の心であるが, 友人である場合もある。
51. *puṇarntuṭaṇ pōtaḷ* {124, 390}
 駆け落ち。59. *uṭaṇpōkku* を見よ。
52. *pūppu eytutaḷ* {157}
 女が生理になること。
pūppu は, *pū* (花が開く) から派生した名詞である。
53. *teḷittaḷ* {169, 238, 247①}
 男が女の不機嫌・怒りをなだめること。
 女の不機嫌の原因は, 男 (夫) が遊女の所へゆくことである。57. *uṇarppuvayin
 vārā-ūṭaḷ* を参照されたい。
54. *teyvam paravutaḷ* {87, 378}
 [安全を願い] 神に祈ること。
 女が男の旅の安全を祈ること, また養母が駆け落ちした女の安全を祈ること。
55. *tōliyiṛ-kūṭṭam* (*tōliyiṛ-puṇarcci*) {13, 17, 81}
 女の友人 (*tōli*) の手引きによる逢引。
 結婚前の段階 (*kaḷavu*) における, 最も大きな主題である。12, 13, 30, 43などの
 術語を参照されたい。
56. *tūtu* {106, 130①, 130②}
 [二人の間をとりもつ, あるいはとりなす] 使者。62. *vāyil maṛuttaḷ* を見よ。
57. *uṇarppuvayin vārā-ūṭaḷ* (19, 128①)
 男が女の不機嫌をなだめても, なお女が不機嫌であること。

夫が他の女のところへ行くために起る夫婦間の不和、妻の不機嫌を *uṭal* という。小さな夫婦喧嘩を *pulavi*、喧嘩の長びくものを *tunī* と呼ぶこともある。いずれの場合でも、*akam* 文学では仲直りすることになるが、この仲直りとして再び交ることを *uṇartal* という。*marutam* の中心的な主題である。

58. *ūrmēr vaittu molītal* {34}

人々が女のために結婚準備などの活動をしていることを、女の友人が女に語って聞かせること。

59. *uṭaṇpōkku* {115}

駆け落ち。

女の両親が二人の結婚を許さない時、駆け落ちする。*palai* の代表的な主題のひとつである。なお駆け落ちは、一種の結婚形態と見做される。

59-a. *uṭaṇpōkku nayattal* {217, 343}

女の友人で駆け落ちすることに同意し、女にそれを勧めること。

59-b. *uṭaṇpōkku nērtal* {262, 383, 388}

女の友人が、駆け落ちを求める男に同意すること。

59-c. *uṭaṇpōkku uṇarttal* {149, 262, 369}

〔駆け落ちに同意して〕駆け落ちすることを、女の友人が女に知らせ〔勧め〕ること。

60. *vaṇpurai* {22, 59, 66, 82, 110②, 130①, 148, 175, 180, 192, 197, 215, 221, 223, 232, 243, 251, 253, 254, 273, 279, 281, 285, 290, 300, 308, 314, 317, 329, 348, 356, 371}

女の友人が、〔女の悲しむ様子を見て〕女を慰さめ、力づけること。

5. *āruvittal* に同じである。参照されたい。

61. *varaivītai āraṁmai* {28, 134, 145, 170, 171, 172, 205, 226, 240, 245, 301, 304, 334, 377, 381, 394, 395}

結婚 (*varaivu*) するまでの間の、女の不安・苦悩。

男は〔最初の〕逢引の際、女に「結婚する」と誓った。しかし、仲々女の両親のところへ結婚の申し込みに来ない。また、もし男が申し込みに来たとしても、両親は断るかもしれない。そんなことで、女は焦躁と不安に悩まされる。

61-a. *varaivītai vaittu [poruḷvayir] pirital* {6, 36, 143, 225, 236, 249, 395}

結婚する前に〔女に対する贈り物や結婚の準備のために〕富を求めて男が旅立つこと。これは、通常余り遠くない所へ、短期間出かけることとされる。*iṭṭuppirivu* とも呼

ばれる。

61- b. varaiviṭai vaittu nīṅkal {397}

61-a. に同じ。

61- c. varaiviṭai vērupaṭal {223, 315, 316, 328, 339}

結婚するまでの間に〔不安などで〕女の容色が衰えること。

61- d. varaivoṭu pukutal {55, 146, 351}

男が結婚の申し込みに〔女の両親のところへ〕やってくること。

61- e. varaivu kaṭatal {18, 169②, 179, 244, 303, 324, 342, 353, 375, 393}

女の友人が、女と早く結婚するように男に頼むこと。

61- f. varaivu malital {34, 51, 52, 297, 351, 361, 368, 389}

〔女の両親・親戚などが〕女の結婚の準備に忙しくしていること。

61- g. varaivu maṛuttal {146}

〔女の両親が〕男の結婚の申込みを断ること。

女の両親が発話者の形をとる作品〔I-3参照〕はない。この詩でも、そのように心配する女に、友人が語っている。

61- h. varaivu nērtal {34, 247, 351}

女の両親が、男の結婚の申込みを受け入れること。

61- f. へと続く。女の喜びを扱う珍しい主題である。

61- i. varaivu niṭtital {25, 38, 51, 53, 54, 90, 97, 105, 111, 112, 117, 118,
125, 133, 152, 169, 187, 248, 367②, 399}

〔男は女に「結婚する」と約束しておきながら、仲々女の両親のところへ結婚の申し込みにも来ないし、結婚の実現に向けて動いてもいない。そうしていて〕結婚が延び延びになること。

61- j. varaivu-uṇarttal {257, 367②}

女の友人が女に、結婚〔式〕が行われることを知らせること。

61- k. varaiyātu vantu-oḷukal {265, 266, 332}

男が結婚しないまま、頻繁に逢引に通って来ること。

62. vāyil maṛuttal {85, 89②, 93, 139, 202, 258①, 354, 384}

〔和解を求めて男が遣わした〕仲介者を拒絶すること。

vāyilとは、二人の間をとりもつ仲介者である。この主題の大部分は、遊女のもとへ男（夫）が行ったために、女（妻）が不機嫌になっているのを知った男が、帰宅

するに際し、まず女のもとに使者を遣わし間をとりもってもらおうとする、というものである。Tol. 1139では、使者になれる人として12種をあげるが、実際には、詩を吟じながら歩くリュート奏者 (pāṇaṅ) や、男の友人で時には男の馭者として表れる pāṅkaṅ が、使者になることが多い。

62- a. vāyil nērtal {9, 10, 33, 45, 258②, 271, 309}

仲介者 [の仲裁] を受け入れること。

62- b. vāyil vēṅṅal {45, 85, 91①, 139, 196, 238, 295, 354, 359}

男が不機嫌な女に和解を求め [使者を送] ること。

63. verī (verī-y-āttu) {360}

ムルガン神にのりうつられた祈禱師が踊る狂乱的な踊り。

妙齡に達した娘は、ムルガン神 (Murukan, 後にスカンダと同一視される) に取りつかれると信じられている。そこで恋煩いに容色も衰える娘を見て、両親はムルガン神に取りつかれたと考え、velaṅ [ムルガン神の持ち物の長槍 (vel) を持つ男、という意味。地位は余り高くない] と呼ばれる祈禱師を招き、娘の病を癒すための儀式をとり行おうとする。祈禱師は祭壇をしつらえ、新鮮な穀物や花などを供え祈禱するが、やがてムルガン神にのりうつられ、酔ったように踊り出す。ムルガン神こそが、人を病いから癒すという解釈もあるが、後世の解釈である。kuṛinci にのみ表れる主題である。3. arattoṭu nirral 参照。

63- a. verī-eṭuttal {111, 214, 263}

[女の病いを癒すため] ムルガン神への祈禱の儀式を行うこと。

63- b. verī vilakkal {362}

その儀式が行われるのを [女の友人が、秘密を暴露するなどして] 止めようとする
こと。

64. vēṛru varaivu {159②, 385}

41. notumalar varaivu に同じ。

65. vērupāṭu (vērupataḷ) {13, 26, 48, 109, 111, 135, 153, 185, 201, 223, 228,
236, 283, 285, 289, 331, 348, 350, 366, 401}

[結婚の遅れ, 別れ, 男の不義などで] 女の容色が衰えること。

愛を得て幸福な時は、女の体はマンゴーのような [黄金] 色に輝き、体に美しい斑点 (titalai, cuṇaṅku) や筋 (vari) が現われる。一方不幸になると、痩せ細り、腕環が手から滑り落ち、体 [特に額] に緑がかかった色 (pacalai) が拡がるとされ

る。

66. viṇai-vaiṇ pirivu {282}

戦争のための遠征に出よ、という王の命令によって起る、二人の別れのひとつ。6種の別れのひとつである〔6. celavu 参照〕。

66-a. viṇai-murṛutal {131, 323}

66-b. viṇai-murri mīṭtal {162, 233}

66-c. viṇai-murri pukutal {270}

66-d. viṇai-murri varutal {398, 400}

以上 a ~ d. はいずれも、遠征という義務を男が果し、女のもとへ戻ること。

66-e. viṇai-talaivaikka-paṭutal {189}

遠征に出よ、という王の命に男が服すこと。

参考文献

BURROW, T. and EMENEAU, M.B. ; *A Dravidian Etymological Dictionary*. Oxford Univ. Press, London, 1961.

Caṅka Ilakkiyam. (2 vols.). Ed. by Es. Vaiyapuri Piḷḷai. Pāri Nilaiyam, Madras, 1967.

HART III, George L. ; *The Poems of Ancient Tamil; Their milieu and their Sanskrit counterparts*.

Univ. of California Press, Berkeley, 1975.

_____ ; *Poets of the Tamil Anthologies ; Ancient Poems of Love and War*. Princeton Univ. Press, Princeton, 1979.

JESUDASAN, C. & H. ; *A History of Tamil Literature*.

Y. M. C. A. Publishing House, Calcutta, 1961.

KAILASAPATHY, K. ; *Tamil Heroic Poetry*.

Oxford Univ. Press, London, 1968.

Kaḷaviyal enṛa Iraiyaṅār Akapporul. With commentary by Teyvappulamai Nakkīraṅār. The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1976.

Kuṛuntokai. Ed. & commented by U. Vē. Cāminātaiyar. (4th ed)

Kapṭr Accukkūtam, Madras, 1962.

Kuṛuntokai. Ed. & commented by Pō. Vē. Cōmacuntaraṅār.

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1978.

タミル古典文学の基礎的研究 (高橋)

Kuruntokai. Marrē Es. Rājam's edition. (Reprint)

New Century Book House, Madras, 1981.

Kuruntokai; An anthology of classical Tamil love poetry.

By M. Shanmugam Pillai and David E. Ludden.

Koodal Publishers, Madurai, 1976.

MANICKAM, V. Sp. ; *The Tamil Concept of love.*

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1962.

MEENAKSHISUNDARAN, T. P. ; *A History of Tamil Literature.*

Annamalai Univ., Annamalainagar, 1965.

NAYAGAM, Xavier S. Thani. ; *Landscape and Poetry; A Study of Nature in Classical Tamil Poetry.*

Asian Publishing House, Bombay, 1966.

Pattupattu; Ten Tamil Idylls. Translated into English verse by J. V. Chelliah. The South India

Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1962.

PERIAKARUPPAN, Rm. ; *Tradition and Talent in Cankam Poetry.*

Madurai Publishing House, Madurai, 1976.

PILLAI, S. Vaiyapuri. ; *History of Tamil Language and Literature.* New Century Book House, Mad-

ras, 1956.

RAMANUJAN, A. K. ; *The Interior Landscape; Love Poems from a classical Tamil Anthology.*

Indiana Univ. Press, Bloomington and London, 1967.

Tamil Lexicon. 6vols and Supplement (reprint).

Univ. of Madras, Madras, 1982.

Tolkāppiyam. Ed. & commented by Ti. Cu. Palacutaram Piḷḷai.

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1943.

Tolkāppiyam Poruḷatikāram. With commentary by Iḷampūraṇar.

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1977.

Tolkāppiyam Poruḷatikāram. With commentary by Naccinārkiṇiyar.

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1980.

Tolkāppiyam in English; With Critical studies.

By S. Ilakkuvanār. Kuṟaḷ Neṟi Publishing House, Madurai, 1963.

Tolkāppiyam; Poruḷatikāram—Tamil Poetics. 3 parts.

By P. S. Subrahmanya Sastri. The Kuppaswami Sastri Research Institute, Madras, 1949 ;

1952 ; 1956.

VARADARAJAN, M. ; *The Treatment of Nature in Sangam Literature.*

The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society, Madras, 1969.

ZVELEBIL, Kamil V. ; *The Smile of Murugan ; on Tamil literature of South India*. E. J. Brill, Leiden, 1973.

_____ ; *Tamil Literature*.

E. J. Brill (Handbuch der Orientalistik. Zweite Abteilung, 2. Band, 1. Abschnitt.), Leiden, 1975.